

4) 父親支援

親向けのアンケートから、夫の子育てや家事への参加の度合いが母親の子育てへの満足感に影響を与えていることが明らかになった。また、父親が子育てに参加するために最も必要なこととして最も多かったのが、父親の労働時間の短縮であった。続いて、ほぼ同数で育児休暇の充実、父子参加プログラム、意識を変える育児講座であった。

夫が子育てに積極的だと答えた積極群では、育児休暇の充実と子育てネットワークの必要性を求め、非積極群では、意識を変える育児講座の必要性が多かった。そのため、比較的積極的な父親には育児休暇の充実や父親同士のつながりが次の課題であり、積極的ではない父親には、その意識を変えるようなプログラムが特に必要であることがわかった。そのため、いくつかのタイプのプログラムの提案を行った。

しかし、支援者のアンケートでは、何らかの父親支援を行っている場合は2割程度に過ぎないという結果であった。その理由としては、プログラムへの参加希望の父親が多くないこと、土日の企画でないと難しいこと等があげられた。つまり、実際にプログラムを用意しても、参加がなければ機能しないと現実があり、社会全体の企業の仕組みから考える必要があるといった声もあげられていた。そのため、このプログラムにおいても働き方を変えるための提案を行っている。

5) 地域・異世代交流

学生がボランティアとして家庭に訪問したり、ベビーシッターとしてかかわることに対して肯定的な声は2~3割であった。しかも、この結果はひろばで日常的に学生と親しく触れ合っている方とそうではない方では大きく異なる結果が生まれた。つまり、日常的に学生と顔の見える関係でかかわっている親子は、学生に対して安心感や肯定感が高く、そうではない方は知らないゆえに不安なのであ

る。だからこそ、ひろばにおいて学生が日常的にボランティアとしてかかわることがとても大切なのである。異世代がつながり、地域で支えあう関係を生み出す拠点としてひろばの機能は大きい。もちろん、学生が赤ちゃんの世話などを行う経験もとても重要であり、そのようなプログラムの提案も行った。

学生同様、中高年との交流も重要であり、これまでの実践例を踏まえ、プログラムの提案を行った。地域・異世代交流においては、安全・守秘の問題、イベント的ではなく継続的なものであること、内部協力の必要性、事前打ち合わせの大切さ、広報などの課題もあげられ、プログラム作成に反映させた。

6) アウトリーチ

ひろばに来られない、あるいは来てもらいたい親子への支援はこれから最も必要で、難しい課題であるとの声が支援者たちから聞かれた。

親たちは専門家等の訪問に関して、必ずしも否定的ではなかったが、第1子の小さな子がいる家庭ときょうだいがいる家庭などではニーズは異なる。子育て初心者の親にとっては、発達や発育について相談に乗ってくれる専門家の訪問を多く求めている。

子育て当事者や先輩ママの訪問を求める声もあった。ヒアリングを行った金沢の子育て応援団の取り組みでは、当事者が特に子育てに負担が多い家庭への訪問を行っていた。そこから、研修を受けた当事者の訪問が有効であることも明らかになった。ただし、そこには情報収集と関係機関ともつながるネットワークシステムが非常に重要である。そのような訪問プログラムも行った。

また、支援者からのアンケートから、他機関との連携、広報、誰でも訪れたいひろばの工夫、出張ひろば等があげられ、プログラムに反映させた。

IV 2. プログラムの実践化に向けて

子ども家庭の支援に本当に役立つ支援プログラムの作成を試み、カナダの先進的なプログラムと日本の支援者および親のニーズ調査の結果を基に、子ども家庭支援プログラムを提案した。

次年度より、このプログラムをひろば等の現場で試行的に実践をはじめ、その結果を随時、評価・検討し、より日本の実情に適ったプログラムに改善していきたいと考えている。

以下に、プログラムのひろば等において活用する際の基本的な考え方と実践にあたっての留意点を要約する。

1) 「ノンプログラム」のプログラムの必要性

ひろばは、次世代を担う子ども家庭を支援するという大きな目的、長期的プログラムをもっている。地域のなかにあるもうひとつの家とか居間と呼ばれることがあるように、いつ来て、何をして過ごしてもよいという自由な場であるが親子が育っていく学びの場である。しかし教室とはまったく違いプログラムはないし指導する教師もいない、替わりに見守り役の支援者がいる。このような常設・ノンプログラム・見守り型の支援は、かつて地域のなかにあった子育てを支援する自然な仕組みに替わるものとして期待されるが、言うは易く行なうは難しで、クオリティを維持して続けていくのはたいへんなことである。ひろばは増えたが、行き詰まっているところもでてきているときく。ノンプログラムでやっていくためには、一時的なイベント型以上に、バックボーンになる確かな理念とプログラムが必要なのである。

本研究では、それぞれが暗黙裡に行なっているプログラムを明確化することと併せて、ノンプログラムで臨機応変に対応できる力量のある支援者、ボランティアを育てることを視野に入れた支援プログラムの作成を試み、11種類のプログラ

ムを提案した。引き出しとしてもっていて、必要に応じて実践できるようにして役立ててほしいと願っている。

2) 親自身の力をつけるプログラム

カナダの子育て支援は、親が子育てを自分自身の課題としてきちんととらえ個として成長できるようにエンパワーメントすることであると考えられている。子育ての時期は第二の思春期だといわれることがあるが、幼児との関係を通して親自身も揺らぐときでもある。子どもの心の成長の出発点として重要な時期であるので、親が安心感と自信をもって子どもに向き合えるように、親の力を尊重し個としての成長を支援するのである。したがって支援者には、単なる助言者ではなく、親自身のもつ力を引き出すことができるような援助者としての専門性を求められている。

自分が親になるまで赤ちゃんに触れたことがない、子どもの心とどう向き合っただいかわからないという若い親たちが増えている状況を考えると、子育て親育ちをきちんと支えていこうという支援の姿勢は予防的な観点からも大切であり、支援者の役割はきわめて大きい。しかし実際にひろばで親子に関する支援者は多層的で、経験、資質、力量もさまざまである。ノンプログラムのひろばであるからこそ自ずと支援者の価値観や生き方がさまざまに影響を及ぼすことをわすれてはならない。日々の活動のなかにスタッフやボランティア研修を位置づけていくことが望ましい。支援者もまた実践・活動を通して自分自身の課題と向き合い、援助者として成長できる仕組みをつくっていかなければならない。

本稿では、III 3. 子ども家庭支援プログラムへの提言のさいごに当たる 12) で支援者の研修をとりあげている。ノンプログラムのためのプログラムを実践するためには支援者としての力をつけることが肝心なことである。先ず支援者の研修プログラムからはじめてほしい。

3) ひろば機能

今回のニーズ調査で、地域のなかには子育てを支えるいろいろな社会資源があるにもかかわらず、ほとんどの親がよく利用しているのは「親子のひろば」であった。また今後も親が最も利用したいとおもっている資源で、ひろばの情報がいちばんほしいのだということも明らかになった。それだけ、ひろばへの期待が大きいと推察される。

このような利用状況を見ると、ひろば機能を充実させることが、子ども家庭支援の充実に繋がっていくものと考えられる。そこで、親子の集うひろばの機能をあらためて検討し、11項目を析出し具体的なプログラム化をして提案したものである。

ひろば機能、あるいは親子の居場所機能とっていいのかもしれないが、この機能のキーワードは、「日常性」と「多機能性」である。ひろばが、家（家庭、家族）、居間といったイメージで捉えられるのはそこに、くつろぎ・団らん、集う、語る、休息、排泄、睡眠、食事、学ぶ、遊ぶ、情報の出・入、人の出・入、新しい命の誕生、祖父母、父親、そして全体としての母性的空間・・・等々、日常性と多機能性を包括した居場所だからである。ひろばは、家や居間の機能そのものではなく、社会との中間的な位置にあって橋渡しの機能ももっている。居場所の機能を充実させるということは、こうした極めて日常的で多面的な活動を素朴に深めていくことであるが、成果をかたちとして積み上げ、継続性のある活動にしていくために、プログラム化して実践することが必要になる。ひろば機能に沿って提案した11のプログラムはいずれも日常的な活動をテーマとしている。これらのプログラムを参考に自分たちのひろばにふさわしい支援プログラムを作成し、実践を積んでいくことを願っている。

4) 実践にあたって

各プログラムは、趣旨・目的、実施方法、

留意点に沿って解説した。ただし、実施方法についての記述は基本例として、

①対象 ②開催日時 ③必要経費 ④募集方法 ⑤ふり返り ⑥フォローアップという手順を示したが、プログラムの内容により必ずしも同じではない。詳しい展開例を挙げる場合、ヒントになる活動例（活動内容のバリエーション）を挙げるなど、適宜示した。

これらの支援プログラムは、細部にわたってマニュアル化されたものではない。趣旨・目的をよく理解し実践方法を参考にし、実践に関る人たち全員が協働で、プランニングからゴールまでを設定して自分たちのひろばに合ったものをつくり実践していくためのものである。その一連の作業の過程で、プログラムの狙いをより深く理解し、ひいては支援することの意味を深め、また支援者としての力をつけていくことを目指しているのである。

次にプログラム全体の進め方について述べる。実践前、実践後を含めて一つのプログラムであることに着目して具体化していくことを大切にしたい。

【実践前にすること】

- ①コーディネーターを決める
 - ・プログラム全体に責任をもって進めるスタッフ。 場合によっては、コ・コーディネーターをおく。
- ②趣旨・目的について共通理解をする
 - ・ブレインストーミング
 - ・基本的な考え方を共有する
 - ・自分たちの「ひろばの理念」を再確認する。
- ③活動方針を作成する
 - ・目的、理由を明確にする
 - ・達成目標をたてる
 - ・安全面への配慮
 - ・支援者の基本姿勢の確認（守秘義務）
 - ・役割分担
 - ・記録
- ④活動計画をたてる
 - ・実施内容に沿った具体的な計画

【実践例】

- ①アイスブレイキング
 - ・気持ちをほぐす。仲間意識の醸成
- ②プログラムの紹介
- ③前半の活動
- ④リフレッシュメント
 - ・短い休憩をいれる
- ⑤後半の活動
- ⑥ふり返り

【実践後にすること】

- ①評価・検討会
 - ・「良かった」で終わらないように
全員検討会
 - ・成果、達成度
 - ・参加者の満足度
 - ・記録を整理する
 - ②フォローアップ
 - ・終了後の参加者の様子に気を配る
 - ・やりっぱなしにしない、次の活動へ参加者の気持ちを繋げていくことが大切である。
 - ・電話、メール、訪問等
 - ③情報をストックする
 - ・報告書にまとめる等
 - ④協力者・機関、他機関との連携
 - ・協力者・機関への挨拶
 - ・情報提供・共有
 - ⑤その他
- 以上の全工程を含めて、一つのプログラムである。

(5) おわりに

ひろばの機能は、かつて地域のなかにあつた子育てを支えていた力に替わるものである。ノンプログラムのひろばの特性をできるだけ失わないように実践することが大切である。これだけのプログラムを実際に活用するとなると、かなりたいへんである。それは、ノウハウが難しいというのではなく、実践者、サポーター、ボランティアの協働体制をつくることの力が関るからである。しかし人間の繋がりを深め、拡げていく好機である。

それぞれにカナダの理念がこめられて

おり、上述のように手順をふんでいくプロセスで支援者もまた理解を深めていくことになるを考える。今後も 地域の中にひろばが増えて、いくこととおもわれるが、官・民、設置主体のいかにかかわらず、同じ質を維持することができるように何らかの支援プログラムの導入が必要である。

IV まとめと考察

3. 今後の課題

本研究の目的は、家族支援の先進国カナダのファミリー・リソースプログラムを模して、日本の子育て支援の現場に導入しうるプログラムを提案することであった。その目的が達成されたかどうかは、今後予定される、ひろば等の現場における実施の如何にかかっている。

プログラムを実施するひろばは、研究協力をいただいた先駆的ひろばや、全国で関心を持たれたひろば等で、現場での試行を期待している。

また厚生労働省が提案して実現しつつある総合施設においても、親支援対策が望まれている。本研究で提案する子ども家庭支援プログラムが実施され、次年度さらに修正改善されて、活かされるものにするための努力を続けていきたい。

次年度、2004年度は次世代育成支援推進法の行動計画策定の年に当たっており、これらプログラムが自治体の計画に組み込まれる可能性もあると考えられる。本研究で提案したプログラムが計画に取り上げられ、実施されることも期待したい。

とくに父親支援については、父親のみならず母親の働き方を含めて、企業の意識改革や協力が欠かせない。父親支援として提案したプログラムが、父親自身の意識はもちろん企業による次世代育成のための行動計画の中に組み込んでもらえることを大いに期待している。

今後の研究計画として、その課題を以下のように考えている。

1) 提案したプログラムをひろば等支援の現場で実践し、支援者および子育て家

庭による評価を検討して、プログラムの修正を行い、実施しやすくより効果的なプログラムに再編する。

2) 父親支援にかかわるプログラムについては、企業等に働きかける。協力的な企業との連携によって、企業のトップや人事課の子育てに対する意識変革のための方策を考える。さらに企業内で、子育てに関心を持つ父親たちのグループでの話し合いを行って、父親支援について、企業向けのより効果的なプログラムを作成する。

3) これらのプログラムを実施するスタッフにはかなりの力量が求められることから、その資質向上およびプログラム実践者としての研修プログラムを作成する。

4) カナダの大学で開講されている、ファミリーサポートのための支援職養成コースについて現地調査を行い、カリキュラムを研究して、日本の大学等に導入しうる養成カリキュラムを作成する。

最後に、本研究のアンケート調査およびヒアリング調査に協力をいただいた、すべての機関・支援者、子育て家庭の皆様に感謝申し上げます。

平成 15 年度厚生労働科学研究補助金(子ども家庭総合研究事業)

研究課題「子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究」

子育て家庭への支援に関するアンケート調査

本アンケート調査は、地域の乳幼児を育てる家庭が必要とする支援は何か、またその支援を行うためには何が必要かを探ることを目的として、子育て支援を実践されている方を対象に行うものです。本調査を通して、現在の子育て家庭に対する支援をさらに充実するための課題を把握し、そのための手立てを探っていきたいと考えております。このような趣旨をご理解いただき、アンケートにご協力いただきたくお願い申し上げます。

このアンケートは、一つのひろば（施設）に対して、お一人の方が代表してお書きください。なお、アンケートにお答えいただいた一部のひろばに対して、事後に詳しくヒアリングもしくは施設見学をさせていただきたいと考えております。そのため、お差し支えなければ、ひろば（施設）の名称および記入者名をご記入いただければ幸いです。ひろばや回答者の名称等を調査結果の中で無断に使用したり、他に公表するようなことは一切ありません。どうぞご協力をよろしくお願いいたします。

研究代表者 伊志嶺美津子（関東学院大学教授）

ひろば（施設）名 ()
 連絡先 (〒)
 TEL
 回答者名（役職等） ()

I アンケートにお答えいただいている方についてお聞きします。

Q1 あなたが子育て支援を行っている場もしくは運営主体について、該当するものすべてに○を付けてください。

(複数回答可)

- ① 公設公営 ② 公設民営 ③ NPO ④ 企業 ⑤ 地域子育て支援センター（保育所）
 ⑥ 子ども家庭支援センター ⑦ 児童館 ⑧ 保育所 ⑨ 役所等行政機関 ⑩ 福祉保健センター
 ⑪ 空き教室利用等 ⑫ 公民館等の公共施設 ⑬ 商店街空き店舗 ⑭ 民間アパート ⑮ 個人家屋
 ⑯ その他()

Q2 あなたが子育て支援に携わる立場について、該当するものに○を付けてください。

- ① スタッフ（専任） ② スタッフ（非常勤、ボランティア） ③ 施設長 ④ サポーター（ボランティア）
 ⑤ 行政担当者 ⑥ その他()

II あなたが携わる子育てひろば等についてお聞きします。

Q1 あなたが携わる子育てひろばの開設状況について、該当するものに○を付けてください。

- ① 週5日以上 ② 週3～4日 ③ 週1～2日 ④ 月2～3日 ⑤ 月1日 ⑥ その他()

Q2 ひろばで行っている内容について、該当するものすべてに○を付けてください。（複数回答可）

- ① 親子の自由な交流の場の提供 ② 親子に対する相談・援助 ③ 地域の子育て関連情報の提供
 ④ 子育てや子育て支援に関する講習 ⑤ 親子の遊びのプログラム ⑥ 子どもの一時預かり
 ⑦ サークル支援 ⑧ 父親対象プログラム ⑨ 出張子育て支援 ⑩ 子育てボランティアの育成
 ⑪ 他機関との連携 ⑫ 中・高・大学生参加プログラム ⑬ 高齢者参加プログラム
 ⑭ 参加できない人、支援が必要な人への働きかけ ⑮ 妊婦への支援 ⑯ 産褥期への支援
 ⑰ シングル家庭への支援 ⑱ 障がい児家庭への支援 ⑲ 利用者企画プログラム ⑳ 広報誌

Q3 Q1で答えた内容以外で、現在、乳幼児の家庭に対して行っている支援活動があれば、具体的にお書きください。

Ⅲ 子育てひろば等での子どもの預かり機能についてお聞きます。

Q1 ひろば等では、子どもの一時的な預かり（保育）を行っていますか。該当するものに○を付けてください。

- ① 行っている ② 行っていないが、現在検討中である ③ 行っていない
④ その他（ ）

Q2 ひろば等利用者の実態を見て、子どもの一時的な預かり保育の必要性はあると感じますか。その実態とお考えについて自由にお書きください。

Q3 Q1で①と答え方にお聞きます。一時保育の利用対象者、預かる人、時間、場所、頻度、子どもの人数などについて、できるだけ詳しく具体的にお答えください。また、預かりを行う上での課題等についてもお書きください。

利用対象者 (条件の有無等)	
預かる人(立場、ひろば担当者との関係等)	
時間(時間帯、預かる時間の目安等)	
場所(ひろばと別室か、広さ等)	
頻度(曜日、週何日等)	
預かる子どもの人数および年齢	
一時保育を行う上での現在の課題や問題点等	

Q3 Q1で②、③、④と答え方にお聞きます。一時預かり（保育）を行う上での課題はどこにありますか。具体的にお書きください。

IV 親の子育て力が高まるための支援活動についてお聞きします。

Q1 親の子育て力を高めるために行っている活動について、該当するものすべてに○を付けてください。(複数回答可)
 ① 子育てに関する講演会等 ② 単発的なグループ学習会(座談会) ③ 連続的なグループ学習会(座談会)
 ④ 日常的に子育てについて話し合う機会提供 ⑤ サークル等の自主グループ育成
 ⑥ 親のひろば運営への参画 ⑦ その他()

Q2 Q1で答えた、現在行っている子育て力を高めるための活動の学習テーマや内容について具体的にお書き下さい。

Q3 親の子育て力を高めるために、今後、どのような活動が必要だと考えていますか。また、それを行うために必要な課題としてはどのようなことがありますか。自由にお書きください。

V 父親が参加する活動についてお聞きします。

Q1 父親がひろばに参加するための意図的な活動を行っていますか。該当するものに○を付けてください。
 ① 行っている ② 行っていない ③ 行っていないが検討中である ④ その他()

Q2 Q1で①(行っている)と答えた方にお聞きします。実際、どのような活動を行っていますか。また、その課題や難しさなどについても具体的にお書きください。

Q3 Q1で②、③、④と答えた方にお聞きします。行っていない理由があればお書きください。また、行うとしたら、どのような課題があると思われますか。具体的にお書きください。

VI 地域の様々な人との交流活動についてお聞きます。

Q1 地域交流活動として、交流のある対象について、該当する対象の番号に○を付け、その具体的な交流内容（活動内容、ボランティア内容等）をご記入下さい。

対 象	交 流 内 容
① 幼稚園・保育園児	
② 小学生	
③ 中学生	
④ 高校生	
⑤ 大学・短大・専門学校生	
⑥ 障がい児・者	
⑦ 高齢者	
⑧ 地域の人材	
⑨ 関係機関	
⑩ その他	

Q2 Q1の地域交流活動を行う上で、どのような課題がありますか。具体的にお書きください。

VII ひろば等に来られなかったり、来てもらいたい親子に対する支援活動についてお聞きます。

Q1 ひろば等に来られない、あるいは来てもらいたい親子に対する支援活動を行っていますか。該当する番号すべてに○を付け、その具体的な内容を記入してください。

支援活動	具体的内容
① 広報活動	
② 家庭への訪問	
③ 出張活動	
④ 関係機関との連携	
⑤ 電話相談時の勧誘	
⑥ 特に行っていない	
⑦ その他	

Q2 ひろば等に来られない、あるいは来てもらいたい親子に対する支援活動についてどのようにお考えですか。また、その課題についても自由にお書きください。

VIII ひろば等での相談活動についてお聞きします。

Q1 どのような方法で利用者の相談を行っていますか。該当するものすべてに○を付けて下さい。(複数回答可)

- ① 日常的な集いの場での相談 ② 面接相談 ③ グループ相談 ④ 電話相談
⑤ 専門家による相談 ⑥ その他 ()

Q2 相談を行う上で課題と感じていることは何ですか。自由にお書きください。

IX 子育て家庭を支援するための支援者の専門性を高めるための研修についてお聞きします。

Q1 ひろば等支援者(スタッフ、ボランティア)の専門性向上のためにどのような研修を行っていますか。行っている場合、研修の具体的な内容について代表的なものを3つまで下の表に詳しくお書きください。

研修内容(テーマや具体的内容・方法)	参加メンバー (参加者の立場等)	講師又はファシリ テーターとなる人	時間帯 (何時～何時)	頻度(年～ 回、月～回)
①				
②				
③				

Q2 スタッフの研修を行う上で、どのような課題がありますか。自由にお書きください。

X さいごに、子育て家庭への支援で、これから行う必要がある支援としてどのようなことがあるとお考えですか。また、それを行うにはどのような課題があるとお考えですか。考えていらっしゃるについて自由にお書きください。

分量の多いアンケート調査であるにもかかわらず、最後までお答えいただき本当にありがとうございました。ご協力に深く感謝いたします。

「子ども家庭支援プログラムの開発に関する研究」グループ一同

※ アンケートに関する問い合わせ先、連絡等は以下にお願いします。

分担研究者 大豆生田 啓友 (関東学院大学)

関東学院大学 人間環境学部人間発達学科

〒222-0011 神奈川県横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL 045 (786) 9841 (学科演習室)

Q3 子育てに関する相談をよくする相手(場)は誰ですか？ 該当するものすべてに○をつけてください。

- ① パートナー ② 自分の親 ③ 義父母 ④ 子育て仲間 ⑤ 友人
⑥ 親戚 ⑦ 保健センターの専門職 ⑧ 保育所の保育士 ⑨ 心理職等相談の専門家
⑩ 近所の知り合い ⑪ その他()

Q4 今後、ぜひ利用したいと考えている子育て支援のすべてに○をつけてください。

- ① 親子が集うひろば ② 子育て相談 ③ ファミリーサポート ④ 子育て関連講座
⑤ 一時保育 ⑥ 子育てサークル ⑦ ベビーシッター ⑧ 冒険遊び場
⑨ 母子の健康や医療に関する相談 ⑩ その他()

Q5 子育てを行う上で、現在特にほしいと思っているものについて、該当するもの3つ以内に○をつけてください。

- ① 親子で気軽に遊びに出かけられる場所 ② 子どもの同年齢の友達 ③ 子育て仲間
④ 子育ての悩みを気軽に相談できる人や場 ⑤ 子どもを一時的に預けられる場 ⑥ 子育て関連情報
⑦ 自分の時間 ⑧ 子育てや家事の手伝い ⑨ 夫(妻)の協力 ⑩ 子育てに要する費用
⑪ 安心して預けられる保育所 ⑫ 子育ての時間の保障 ⑬ 家業の手伝い
⑭ その他()

Ⅲ 子どもを預かる(預けあう)ことについてお聞きます。

Q1 子どもを預ける必要があるとき、誰によく預けますか？

気軽に預けられる人や場として該当するものすべてに○をつけてください。

- ① パートナー ② 自分の親 ③ 義父母 ④ 親戚 ⑤ 子育て仲間 ⑥ 近所の人
⑦ 子育てひろば ⑧ ファミリーサポート・センター ⑨ ベビーシッター ⑩ 一時保育
⑪ 子育て仲間ではない友人 ⑫ 預け先がない ⑬ まだ預けたことがない ⑭ その他()

Q2 子どもを預ける人や場所に対して望むことについて、特に該当するもの2つ以内に○を付けてください。

- ① 気軽に預けられる先がほしい ② 知り合いなど、信頼できる人に預けたい ③ 子どもが泣かずに預けられる場所がほしい
④ 預けるための費用を低く抑えたい ⑤ 預けるための手続きを簡単にしたい ⑥ 預けている間の子どもの様子を詳しく知りたい
⑦ ていねいに子どもを見てほしい ⑧ 保育園等の一時保育を増やしてほしい ⑨ よくわからない

Ⅳ 父親の子育て参加についてお聞きます。

Q1 子どもの父親は、子育てや家事を積極的に行っていると感じですか？ 該当するもの1つに○をつけてください。

- ① とても積極的に行っていると思う ② まあ行っている方だと思う ③ 普通
④ あまり行っていないと思う ⑤ ほとんど行っていない ⑥ その他()

Q2 子どもの父親が子育てに参加するためには、どのような支援が必要だと感じですか？

特に必要と思われるもの1つに○をつけてください。

- ① 父親の育児休暇の充実 ② 父親の労働時間の短縮 ③ 父親の意識を変える育児講座
④ 父親の子育てネットワーク ⑤ 父子が参加する遊びのプログラム ⑥ その他()

Ⅴ 小・中・高校・大学生が自分の子どもにかかわることについてお聞きます。

Q1 子育ての研修を受けた中学、高校、大学生等があなたの家庭に一日入って、子どもと遊んだり、家事を手伝ってくれるような機会があれば受け入れ家庭になりますか？ 該当するもの1つに○をつけてください。

- ① 積極的にになりたい ② なってもよい ③ どちらともいえない ④ あまりなりたくない
⑤ 可否はその学生による ⑥ その他()

Q2 同じように、中学・高校・大学生等がボランティアでベビーシッターとして数時間、家庭等で子どもを預かってもらえたら利用したいですか？該当するもの1つに○をつけてください。

- ① 積極的に利用したい ② 利用してもよい ③ どちらともいえない ④ 利用したくない
⑤ 利用する必要性がない ⑥ わからない ⑦ その他()

VI 地域の子育ての専門家やボランティア等が家庭を訪問することについて

Q1 地域の子育ての専門家やボランティア等が家庭を訪問するシステムがあった場合、何をしてほしいですか？
該当するものすべてに○をつけてください。

- ① 子どもの発達や発育の診断 ② 子育て相談 ③ 家事や育児の手伝い ④ 子どもと遊んでほしい
⑤ 地域の子育て情報等 ⑥ 話し相手になってほしい ⑦ あまり必要性を感じない
⑧ 訪問してほしくない ⑨ その他()

Q2 子育て家庭への訪問があるとすれば、どのような人に訪問してほしいですか？

- ① 保健師・助産師 ② 保育士 ③ 臨床心理士や発達相談の専門家 ④ ホームヘルプのボランティア
⑤ 子育て当事者や先輩ママ ⑥ 医師 ⑦ 保育者を志す学生 ⑧ 民生委員や主任児童委員
⑨ その他()

VII 地域の子育て情報について

Q1 どのような地域の子育て情報が必要だとお感じですか？ 特に該当するもの2つ以内に○をつけてください。

- ① 幼稚園・保育園 ② 病院 ③ 親子が集える場所(ひろば等) ④ 子育て相談の場 ⑤ 公園
⑥ 遊び場 ⑦ 子ども向けのイベント情報 ⑧ 絵本やおもちゃ ⑨ その他()

VIII 農山漁村地域の方のみの質問項目 (※該当しない方は、最後の自由記述にお進み下さい。)

Q1 農産漁村地域の子育て支援として、必要と思われるものすべてに○をつけてください。

- ① 子育て仲間が集い、話せる場 ② 子育て相談の場 ③ 子育てのイベントに参加しやすくなる案内や働きかけ
④ 子育てひろば(スタッフがいて、親子や祖父母が気軽に集える場) ⑤ 祖父母のための育児教室
⑥ 祖父母のボランティア活動支援 ⑦ その他()

自由記述

子育てをする中で必要と感じている支援について、自由にお書きください。

アンケートにご協力いただき、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

研究組織・構成員

- 研究代表者 伊志嶺美津子（関東学院大学教授）
- 研究分担者 榎田紋子（浦和大学教授）
大豆生田啓友（関東学院大学専任講師）
- 研究協力者 田島昌子（頌栄保育福祉専門学校講師）
金山美和子（上田女子短期大学専任講師）
千葉勝恵（NPO 法人手をつなご代表）
渡部博昭（財団法人児童健全育成推進財団総務部課長）
依田幸子（江東区東陽子ども家庭支援センターみずべ センター長）
早川貴美子（江東区大島子ども家庭支援センターみずべ センター長）
新澤拓治（江東区大島子ども家庭支援センターみずべ
地域ネットワーク主任）
高橋智美（江東区東陽子ども家庭支援センターみずべ子育て支援ワーカー）
岡本彩湖（江東区東陽子ども家庭支援センターみずべ子育て支援ワーカー）
大豆生田千夏（NPO 法人びーのびーのスタッフ）
- 執筆協力者 平野耕一
大庭みどり（Playroom Coordinator, South Vancouver Family Place）
- 資料提供 パットファノン
(Pat Fannon : Executive Director, Parent Resources, Ontario)
大庭みどり
- 翻訳 平野耕一
高橋智美
岡本彩湖
南ひろこ
- 事務担当者 服部正絵

執筆担当箇所

伊志嶺 美津子	はじめに I-1. 2. II-1. III-1. -1) 2) 3) 4) 6) III-2. -4) 5) 6) 8) 9) III-3. -1) 3) 4) 5) 10) 1 2) IV-3.
櫃田 紋子	II-3. III-1. -5) III-3. -8) 9) IV-2.
大豆生田 啓友	II-2. III-2. -1) 2) 3) 7) 8) 9) III-3. -5) 6) 7) IV-1.
田島 昌子	III-1. -2) III-3. -8) 11)
金山 美和子	III-2. -2) III-3. -4) 9)
千葉 勝恵	III-3. -3) 6)
渡部 博昭	III-2. -3) III-3. -10)
依田 幸子	III-3. -11)
早川 貴美子	III-3. -2) 7)
新澤 拓治	III-3. -2) 5) 6) 7)
高橋 智美	III-2. -1)
岡本 彩湖	III-2. -1)
大豆生田 千夏	II-2. -7) III-3. -3) 12)
平野 耕一	III-1. -4)
大庭 みどり	III-1. -1) 6)